

時代小説ベスト・セレクション

11

講談社

侍ここにあり

士道小説集



4.



時代小説ベストセリング

侍にあり

時代小説ベスト・セレクション 第十一巻

侍ここにあり 士道小説集

一九九五年一月二四日 第一刷発行

著 者 五味康祐 他

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

郵便番号 一一二一〇一

東京都文京区音羽二一二二

電話 編集部 (〇三) 五三九五―三三〇五

販売部 (〇三) 五三九五―三六二二

製作部 (〇三) 五三九五―三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価はカバーに表示してあります。



乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

©Yasusuke Gomi and Others 1995.

Printed in Japan

ISBN4-06-254911-5 (文2)

侍ここにあり◆目次

国戸団左衛門の切腹

五味康祐 8

かたくり献上

柴田錬三郎 34

異聞浪人記

滝口康彦 54

金玉百助の来歴

神坂次郎 82

刎頸の友

尾崎士郎 88

鰈の縁側

小松重男 112

潮田伝五郎置文

藤沢周平

150

刀

白石一郎

182

土佐兵の勇敢な話

中山義秀

212

編者解説

縄田一男

230

装画 村上 豊
装丁 熊谷博人

侍ここにあり

〔士道小説集〕

五味康祐

国戸団左衛門の切腹

智恵伊豆ちえいずと評判された松平伊豆守の家来に国戸くにと団左衛門だんざえもんという土さむらいがいた。

或る年、伊豆守上洛の時に、番頭ばんがしらよりこのたびの御供おともの騎馬士は各々手に合う馬を用いるようにと達しがあった。団左衛門は番士をつとめていたが、女馬に乗って出たから、他の面々の馬が騒ぎ立て、行列が乱れた。番頭がとがめると団左衛門は、このたびは手に合う馬に乗れとの御触れゆえ、拙者これに乗り申して候という。番頭は、尤もなれども行列が乱れて困る、他の馬に取り替え

よと言った。

しかし団左衛門は、

「拙者このほかに手に合う馬これなく候えば取り替え難し。されど、御行列を乱し候ては申訳あい立たず」

そう言つて、早速、馬に下帯を作り、これをはかせたら馬共もしずまり無事、行列をととのえることが出来た。——以来、人々は彼のことを女馬団左と異称した。

その翌年正月、具足の餅祝いの時のことである。

大久保彦左衛門と今村九兵衛なる兩人は、未明より江戸城に出仕していたが『山吹の間』に用事があつて出向いている間に、本席では兩人の姿が見えぬので、右二人は遅参と思い、すでに御祝いがはじめられた。

折から目付衆が部屋々々を見回ったら『山吹の

間』に二人が居る。目付衆は、「御祝いすでに始まりたり、匆々そうそうに着座いたされよ」と伝えた。

きいて彦左衛門は顔色をかえた。

「我々は今朝未明より相詰めてござるぞ。然るに何の御沙汰もなく御祝い始まりしとは其の意を得ず。神君御代おんだいよりかようの事に御失念は無き事なるに、今日、御失念なされるからはもはや我々年老い、御用に立たずとの御思召しなるべし。しかれば何の面目あつて参列せん、そうそう退出いたし申すわ」

と大音に言った。

老中をはじめ役人中はこれを聞いて驚いた。今村九兵衛はともあれ、大久保彦左衛門は神君よりの旧臣で、こういう御祝いには第一の人物だからである。そこで役人中は種々挨拶したが彦左衛

門、耳をかさない。

見兼ねて、老中松平伊豆守が、

「これは御老体の御怒りも道理ながら、全くの失念なればこそ役人共もことを尽くしてお詫びを致してござる。——さ、席へおなおり下されよ」

と言った。

彦左衛門はこうこたえた。

「我等は御旗本頭なり。されば軍札に御旗槍失念ということあるべきや。もはや一番座すみたるからは洗い膳なり、我等洗い膳にて喰いたることなし。長生きすれば、めずらしきことを聞くものかな」と嘲あざけった。

伊豆守は立腹の様子だったが、語気をしずめ、「御老体も無茶を申される、余人の場合とはかく、將軍家の御祝いに洗い膳と申すがものはござるまい」と云った。

彦左衛門はからからと笑つて、

「伊豆どのは畳の上にて戦場は見たことも無いゆえ軍辞を知らぬと見えたり。二番座に出るを洗ひ膳と云いてまことの士は嫌うものじゃ。よく覚えおかれい」

いかな伊豆守もむつとしたらしいが、云うべき言葉なく、甚だ氣の毒に見えたところへ、酒井忠勝が出て、彦左衛門の手をとつて、

「老人のことば尤もなり。さりながら今日は格別の御祝いなれば、時移りては如何。ささ、席へなおられよ。忠勝が相伴しやうばんをいたし申そう」

言われて、

「さてさて讃岐守殿は天下の老中なるに相伴くださるとはかたじけなし、されば、いただき申そうか」

別人のように彦左衛門きげんを直して座につ

き、それより祝いの儀もとどこおりなく済んだ。

このはなしが、いつとはなく列座の諸大名、旗本の家中かちやうに知れ、当然、松平藩の歴々衆も知るところとなつた。聞いて顔色を変えたのが国戸団左衛門である。

「それは殿が悪い」

開口一番、団左衛門は言つた。弓始めで家中の面々が射場にて一汗かいたあと、藩邸の広間に居揃うて雑談のときである。

「とのがお悪いと？ 団左、正月勿々チトことばを慎んだらどうじゃ」

相役あいやくの矢壁伊右衛門がたしなめると、

「いいや、悪いものは悪いと申上げるが臣下の道じゃ。二番座にすえられては御旗奉行でのもツムジを曲げられるのが当然と心得る。との申され様が悪かつた。——但し、満座の中で殿に恥

をかせられ、臣たるものが黙っておるわけには参らん。ことの是非は兎に角、こうなつては我らにも為様せんようがござる」

と言つた。

時に团左衛門四十二歳。女馬が手に合うほどだから、日頃あまり武辺立つ話などは聞かないのに、せんよう有りなぞと意気込むものだから矢壁が案じて、

「どうしよう魂胆じゃ」

「どうと申して、日頃昵懇じつこんのおぬしにもこればかりは明かされん——委まかしておいてもらおう」

麻柝かみしものすそを手で払つて立つと、車坐になつて、朋輩ほうばいへ会釈して、

「身共はこれにて退出いたす。ごめん」悠然と広間を去つた。

团左衛門のこのとき考えていたのは彦左衛門に對抗し得る人物・伊達政宗のことである。

政宗は独眼で有名だが、このいわれは、幼少の頃に片目の玉さがり出て、甚だ見苦しかった。家士の片倉小十郎が言上するには、君の目玉は片方さがりて見苦しきのみならず、戦場の御働きにも邪魔になり申すべし、万一組打ちなどには下りたる御目の玉を敵に握られなば必ずお負けなさるべし。されば下りたる目玉不用のみならず、却つて害になり申すべければ切捨て給うてはいかが。万一切捨て給いおいのちにさわる事も有らば某それも切腹して冥土へお供つかまつらん。そう云つてすめたので、政宗も「至極なり」と目の玉を切り落としたが、出血おびただしく、激痛に堪えかね

たか今にも絶え入るように見えた。

小十郎は耳元へ口を寄せ、大音に、

「さても未練なる御ありさまかな。昔鎌倉権五郎景政は敵に眼より脳へかけて射ぬかれけれども、其矢を抜きも取らずそのまま敵を追い行き遂に討取りしとか聞き申すぞ。これしきの御事にかくよわらせ給うとは、言い甲斐なき大将かな」

そう言つて励ましたので、政宗は目を開き、むつくりと起きなおつて、

「我おもわず不覚をとつたり」と叫んだ。

のちのちまで、そのことは絶えず政宗自身も物語り、「われ目の玉を切り落としたる時の不覚は生涯の不覚なり」と言つたという。

そういう政宗で、大坂夏の陣の時には政宗の陣前を徳川家の旗本神保長三郎が騒がした時、政宗は鉄砲を打出させ多勢で討つて出た。神保が愕い

て、我は御味方なり、早まり給うな、と言つたが、政宗は聞き入れず、

「味方にもせよ我が陣前を騒がしたる者何ぞ許すべきや」

と忽ちに射止めさせ首を打取つたことがある。

又、政宗は中納言に任せられた時、島津家久が薩摩中納言というのに倣つて陸奥中納言となえたい旨を願ひ出たが、水戸中納言、小松中納言（前田利常）らと同然に仙台中納言というように、陸奥と言うこと相成らずとのことだった。依つて、生涯、陸奥守とばかり書いて中納言とは書かなかった。そういう政宗である。

尋常では、譜代大名として松平伊豆守は三万石、政宗は六十二万五千石、その松平家の団左衛門は一番士にすぎない。天下の独眼竜に対面のかなうわけはないが、倅い、団左衛門には良い友達があ

った。百人番の頭で横田次郎兵衛基成もとなりという士さむらいである。

政宗は参勤交代のおり鉄砲の火縄に火を点つけて持たせ、仙台城下は江戸城のごとく曲輪くるわを衆人に往来させるなど、他家と異った、家風を見せていたが、三代將軍家光の代になっても政宗には格別のお取り扱いがあり、或る時などお酒を下させて沈酔のあまりその席に寝てしまうと、上意により、奥まで乗物を入れさせて政宗を乗せ、そのまま昇かき出させた。ひつきよう急病人の扱いである。

しかるに政宗はこれにてよい例が出来たと、その後出仕するにも乗物を降りず、悠々と昇かせて通った。番士が咎めると、

「先日おゆるし有りし事なれば苦しからず、捨ておけ捨ておけ」

言い放つて通過する。これを聞いて怒ったのが百人番横田次郎兵衛だった。

横田は、

「われら当番の節、政宗もし乗打ちしたらんには構うことなし、与力同心立ちいでて政宗が乗物を打ち砕け。この次郎兵衛が下知するほどに決してひけを取るべからず、万一、あとにて伊達侯が申し立てにより御咎めあらば、我が切腹いたして其方共らには科とがをかけぬ。よいか、充分に打ち砕いてくれい」

百人番というのは徒士かちたい隊のことで、徒士は將軍の儀仗兵・警士ぎじょういともいうべき役柄だが、身分は軽く俸禄もすくない。ひら徒士でせいぜい七十俵五人扶持、組頭の横田次郎兵衛で百五十石である。

それが、政宗の登城を待ち構えて率先して城門に立った。

政宗はそこへ登城した。乗物の中よりフト様子を見ると百人番が何やら立騒いでいる。さすがは政宗で、その事を察してゆらりと乗物を降り、番所の前を通りがかりに横田を見て、

「この年寄りが乗物のまま通されても苦しかるまいに、そうムキになって同心の世話なぞせずと、我等方へ遊びにでも来たらどうじゃの。旨い酒を振舞い申すで」

笑いながら言い捨てて、横田の面前を通過すると、

「千十郎」

「はっ」

「その方、前に立て」

ハツとするほど厳しい語気で近侍に命じ、先払いに立てると悠然と石の階きざはしをのぼった。その貫禄まさにあたりを払ったが、政宗も政宗なら楯突

く横田も横田なり、天晴れな丈夫もののふよと評判になった。

その横田次郎兵衛の役宅を団左衛門は訪ねたのである。

三

弓始めの催されるのは正月十七日で、京の兵部省では射手を定め、この日、建礼門で射礼の儀式の行われるのに倣ったもので、正月七日、武家の射術を将軍が上覧する射初いざめとは別である。

と云つても、まだ十七日といえは男の具足祝いに対する婦女の鏡餅の祝いもすまず、注縄連明しづなづなめけは見たが家々にはまだどことなく初春の気分が溢れている。

横田次郎兵衛は団左衛門と同年で、女むすめが二人あり、嫡男のないのが常々次郎兵衛の憾うらみである